

目次

刊行にあたって iii

第1章 日本語話者による英語の可算・不可算の区別の習得 稲垣俊史	1
第2章 第二言語習得における形態素の習得 — WH-in-situ 疑問文の習得からの考察— 梅田真理	27
第3章 第2言語における普遍的な文理解メカニズム 宮本エジソン正 吉田絢奈	61
第4章 前置詞脱落の誤りと格の関係 — 受動文と疑問文・関係節の比較から— 穂苅友洋	91
第5章 日本語を母語とする英語学習者の派生接辞の習得難易度順序 田村知子 白畑知彦	125
第6章 完結性解釈の段階的発達にみられる母語の影響と語彙の転移 若林茂則 木村崇是	163

第1章

日本語話者による 英語の可算・不可算の区別の習得

稲垣俊史

1. はじめに

(1) と (2) に示すように、英語では名詞の単数・複数を義務的に示さなければならぬのに対し、日本語では名詞の単数・複数の表示は義務的ではない。

- (1) a. Mari bought [a book/books/*book].
b. Mari bought [sugar/*a sugar/*sugars].
- (2) a. マリは本を買った。
“Mari bought [a book/books].”
b. マリは砂糖を買った。
“Mari bought sugar.”

もちろん、日本語でも「冊」などの助数詞を使って数を明示すること（例：3冊の本）は可能である（Muromatsu, 2003 を参照）。さらに、使えるのは人間を表す名詞のみであるなど制約は多いが、「たち」（例：学生たち、*花たち）などの複数を示す接辞も存在する（Inagaki, 2014, p. 465 を参照）。しかしながら、このような数の表示は選択的で、英語における義務的な名詞の数表示とは性質が異なるものである。英語のようなタイプの言語は可算・不可算言語（**mass-count language**）と呼ばれ、日本語のようなタイプの言語

第2章

第二言語習得における形態素の習得

—WH-in-situ 疑問文の習得からの考察—

梅田真理

1. はじめに

第二言語 (L2) 学習者による形態素の習得は、L2 習得研究の初期段階からこれまで大きな関心を集めてきた¹。これまでの研究によると、複数形 /-s/、過去形 /-ed/、そして冠詞などの文法的な意味を持つ機能形態素 (functional morphemes) の産出において、上級レベルの学習者であっても、母語話者と同様の一貫性と正確さをもって産出するのが難しいことが指摘されている (Franceschina, 2005; Lardiere, 1998a, b; McCarthy, 2008, など)。多くの研究が形態素の産出に注目をしてきたが、近年では形態素の理解や言語処理の領域で、L2 学習者の形態素の習得を検証する研究も行われている (Franceschina, 2002; Grüter, Lew-Williams, & Fernald, 2012, Hopp, 2013; McCarthy, 2008; White, Valenzuela, Kozłowska-Macgregor, & Leung, 2004, など)。

本稿では、中国語話者による日本語の WH-in-situ 疑問文 (WH-in-situ questions) に用いられる形態素の習得を検証する。日本語と中国語はどちらも言語分類上は、WH-in-situ 言語と呼ばれる。そして、WH 疑問詞が節頭の位置へ移動する英語やドイツ語などの言語とは異なり、WH 疑問詞が元位置に残る言語として区分されている。

1 本稿では、「L2」という表現を母語以外の言語の習得に対して使用する。また、「学習者」という表現は、母語以外の言語を学習、或いは使用する人を指すこととする。

第3章

第2言語における 普遍的な文理解メカニズム

宮本エジソン正 吉田絢奈

1. はじめに

従来の第2言語(L2)に関する研究は、学習者によるL2の言語知識の獲得を中心に行われてきた(Doughty & Long, 2005等)。しかし、近年では、L2の文理解(parsing)、つまり、L2の文を理解するために学習者がどのように知識を使用するかについての研究が行われている¹。言語理解におけるパーサー(parser)とは、人々が文を処理し、意図された意味を理解するために言語知識を使用する方法であり、アルゴリズムのことを指す。例えば、英語では三人称単数の主語と現在形の動詞、例としてMaryとeatの間では数の一致があることを学習者は知識として知っているだろう。そこで疑問となるのが、Mary eats apples everydayのような文のそれぞれの単語を読む際に、学習者はどのようにその知識をわずか数百ミリ秒の間に使用しているのか、ということである。

言語理解に関して、知識とパーサーという二つの要素から成り立つという考えについては議論の余地がある。しかし、この章で取り扱う議論を進めるためには、役立つものである。また、従来の研究者らがこれらの2分野についてそれぞれ個別に研究を進めてきたことを示すにも便利な分け方であ

1 Clahsen & Felser (2006a), Wen, Miyao, Takeda, Chu, & Schwartz (2010) 及び、その参考文献を参照されたい。

第4章

前置詞脱落の誤りと格の関係

受動文と疑問文・関係節の比較から

穂苅友洋

1. はじめに：研究の目的

(1) の文はどれも文法的な誤りを含んでいる（アスタリスク (*) は文や表現が誤っていることを示す）。

- (1) a. 平叙文：*The students talked the topic at the meeting.
- b. 疑問文：*Which topic did the students talk at the meeting?
- c. 関係節：*This is the topic that the students talked at the meeting.
- d. 受動文：*The topic was talked at the meeting.

(1) の文の誤りは、いずれも必要な前置詞が欠けている点である。talk は自動詞であり、talk about the topic のように、前置詞句を目的語にしなければならない。よって、(1) の文の誤りを訂正すると (2) になる。

- (2) a. 平叙文：The students talked about the topic at the meeting.
- b. 疑問文：Which topic did the students talk about at the meeting?
- c. 関係節：This is the topic that the students talked about at the meeting.
- d. 受動文：The topic was talked about at the meeting.

第5章

日本語を母語とする英語学習者の 派生接辞の習得難易度順序

田村知子 白畑知彦

1. はじめに

たとえば, kind (親切的な) という形容詞は, その前後に「何らかの要素」を付加することで, 意味合いや品詞を「変化」させることができる。前に un- を付加し, unkind とすると, それは, 「不親切的な」という意味を表す形容詞となる。また, 後ろに -ly を付加し, kindly とすると, 「親切にも」という副詞に変化する。-ness を付加し, kindness とすれば, 「親切」という名詞になる。このような, 「何らかの要素」のことを接辞 (affix) と呼ぶ。そして, 前に付加する接辞を接頭辞 (prefix) と言い, 後ろに付加する接辞を接尾辞 (suffix) と呼ぶ。接辞はそれ自体では単独で存在することができず, 基体となる語 (base word) (ここでは kind) に付加し, 関連するが意味や品詞が変化した語を形成する。したがって, 我々の言語は, 語に接辞を付加することによって, 1つの語を中心として関連する語彙を大量に増やすことを可能にしているのである。

接辞には, 接頭辞, 接尾辞の区分とは別に, 派生接辞 (derivational affix) と屈折接辞 (inflectional affix) という区分の仕方もある。派生接辞とは, 前述の un-, -ly, -ness のように, 語に付加してその品詞や意味を変え, 関連する新しい語 (派生語) を作ることでできる接辞を言う。一方, 屈折接辞とは, look (見る) に付加する規則過去形形態素の -ed (例: looked) や現在進行形

第6章

完結性解釈の段階的発達にみられる 母語の影響と語彙の転移

若林茂則 木村崇是

1. はじめに

本研究では、英語の文の完結性 (**telicity**) について、日本語母語話者の解釈を調査し、第二言語習得における文法発達の一面を明らかにする。文の完結性は、語彙・形態・統語の組み合わせで決まる。時制を過去に、動作主を主語に、主題・対象を目的語にとる行為動詞の文に限定して実験を行った結果、完結性の解釈の習得には複数の要素が関わる段階的な発達がみられることが明らかになった。本稿での考察および結論をあらかじめ述べると以下のようになる。

- ・初期段階では母語の影響はみられず、ある程度習得が進んだ段階になって、正の転移 (**positive transfer**) が起こる。
- ・日本語母語話者にとって、定冠詞 (**definite article**) *the* + 複数名詞 (例: *the apples*) が目的語になる場合、不定冠詞 *a (n)* や指示詞 (**demonstrative**) *these* がある名詞句 (*an apple, these apples*) が目的語の場合よりも、完結性の解釈が難しい。
- ・この難しさの差は、定 (**[+definite]** / **[+def]**) を用いた完結性の計算の複雑さの違いに原因があるのではなく、計算に必要な *the* などの語彙的特性、および学習者の母語に目標言語の語と同じ語彙的特性を持つ語がある